

[科目紹介]

日本語学Ⅰ・Ⅱ

普段、当たり前に使っている日本語について学ぶ、この授業。その「当たり前」を、私たちはどのように理解しているのでしょうか？



無意識の理解を
論理的にひも解く

ユニークな課題が多く、
楽しみながら
日本語の奥深さを
学べます！



[紹介者] 文化交流学科3年
志智 俊哉さん
茨城県立 太田第一高校出身

この科目では、私たちの母語である日本語の特徴を、「音声」「文法」「語彙」「表記（文字）」といった観点から学んでいきます。こう聞くと、難しそうで堅苦しい授業だと思ってしまうかもしれませんが、そうではありません。「表記」を例に挙げると「葉（くすり）を買う」と「クスリを買う」では、後者は怪しい印象になりますよね。カタカナは「アップル」のような外来語だけでなく、俗語などにもよく使われているのです。このように自分たちが何気なく見分け、使い分けている日本語の性質を、論理的に理解していくことが、この科目の醍醐味です。

日々の言葉を改めて見つめ直す

これまでで特に印象的だった課題は「母音の長さで意味が変わる単語のペアを探す」というものです。「きて」と「き

いて、「ゆめ」と「ゆうめい」、「おばさん」と「おばあさん」などといった例は、探してみるとたくさんあり、日本語話者にとっては身近なものです。母音の長さという概念がない外国人にとっては理解や学習が難しいのだそうです。留学生の受講者も多く、ある面では私たちより留学生のほうが日本語に対する理解が早い場合があります。それもまた、この授業の興味深い一面だと思います。

教師をはじめ、
あらゆる職業に役立つ力

普段、当たり前に使っている日本語も、このように意識して考えてみることで、新しい発見につながり、より深く学べます。日本語教師の資格に必要な知識が得られるのはもちろんですが、養われるのはそれだけではありません。例えば、日本を客観的に見る練習は、自分自身を知るきっかけにもなり、教師に限らず、どの職業をめざす人にとっても役に立つと感じています。

担当教員から



文化交流学科教員 中山 健一

言語を通じて
自分や世界を「新発見」する

日本語は受講生のほとんどにとって母語であり、自由に操ることができる言語です。しかし、幼い頃から無意識に身につけた言語なので、特徴を説明するのは意外と難しいもの。日本語学では、日本語を世界の諸言語のひとつとしてとらえ、その特徴を学びます。単に言語的知識を身につけるだけではなく、具体的な現象や例文の観察、および他言語との比較などを通じて、「対象を客観的・相対的な視点から分析する」というスキルのトレーニングにもつながるよう心がけています。

ミニクイズ

「～している」の形が含まれる次の文のうち、表される意味が違うものはどれ？

- ①人が走っている。
- ②人が泣いている。
- ③人が倒れている。

(答えは下に)

- ・授業を受ける年次／2年次
- ・履修可能学科／看護学科を除く全学科
- ・授業計画／母語話者・非母語話者にとっての日本語、日本語の音声・文法、茨城の方言の音韻論、日本語の語彙、ひらがな・カタカナ・漢字の使われ方、等

正解：③……①と②が動作をしている最中であることを表すのに対し、③はすでに「倒れた」あとの状態を表している。